

読書のすゝめ

立志館ゼミナールから、この夏おすすめの本を紹介します。おもしろそうに思える作品があれば、ぜひ読んでみてください。

今昔続百鬼一雲

京極 夏彦(きょうごく なつひこ) 高島先生 講談社文庫

自称「妖怪研究家」多々良勝五郎センセイは、助手(?)の沿上さんと共に、妖怪伝説蒐集の旅に出ます。道中、宿を探し求める彼らの前で怪事件が……。聞こえてきたのは「カ、カッパカ！」という叫び声。妖怪馬鹿コンピの大冒険の始まりです。

「妖怪」に興味はありますか？

あんな子どもだましの……。というなかれ。彼らは様々な文化の象徴として生まれているのです。いわば昔の人たちの「生活の知恵」。

奥が深く、おもしろい存在なのです。その妖怪研究を対象の一つにしているのが民俗学。この物語は、多々良・沿上コンピのドタバタ大活躍を楽しみながら、民俗学一端を知ることが出来ます。

キケン

有川 浩(ありかわ ひろ)

新潮文庫 山本先生

主人公はみなさんより少し年上の大学生。成南工科大学機械制御研究部、略して機研。しかし、他の学生からはこう言われる。キケンニ危険。

火薬、爆発、ロボットなんでもござれ。新入生歓迎会、学園祭、ロボットトーナメント……。あらゆることに全力投球し、結果、教授に追い回されることは日常茶飯事。そんな先輩に振り回されながら徐々にキケン式に染まっていく一年生たち。そんなキケンの黄金時代をショートストーリー形式で綴った作品です。

みなさんはどんなことにも全力でぶつかっていますか？ 今を全力で楽しめていますか？ 楽しくてちょっぴり切ない青春や、二度とは戻らない今という時を全力で生きる大学生たちの姿を一足先に覗いてみませんか。

キーワードはガシャポンのケースと花火の火薬。「やあ、靴ひもの準備は万全か」



白いへび眠る島

三浦 しをん(みつら しをん)

吉美先生 角川文庫

主人公の悟史は小さな島で生まれ、高校生活で初めて島の外での暮らしを体験します。悟史は閉鎖された島の暮らしに違和感を持っており、高校生になってからはほとんど島には帰っていませんでした。そんな悟史が高校三年生の夏休みに島に戻った時、ある奇妙な事件に巻き込まれ、幼なじみの光市と共に事件の真相を追います。そこで悟史は改めて自分の生まれた島を知り、自分の生き方について考えます。

みなさんはこれから、高校生、大学生と成長していくにつれ、今任んでいる場所を離れていくかもしれません。そんなときに、改めてもう一度自分の育った場所について考えてみてはどうでしょうか。案外、人には育った場所の影響が色濃く残っていることもあります。自分を見つめ直す機会になるかもしれませんね。

星のかけら

重松 清(しげまつ きよし)

田中先生 新潮文庫

ある日、主人公のユウキは、塾の友だちのマサヤから、持っているだけでこんなに辛いことがあるかも耐えられる、という「星のかけら」の話を聞かれます。ウワサでは、その「星のかけら」は、誰かが亡くなった交通事故の現場に落ちているそうです。とても気が弱く、学校でも塾でもいじめられてしまうユウキは、「星のかけら」を探しにいった夜、とても不思議な女の子、フミちゃんに出会います。

この話を読むと、「命」の意味について考えることができ、生きることに前向きになれると思いますよ。

パズル

山田 悠介(やまだ ゆうすけ)

山田先生 角川文庫

全国でも有数の進学校の、さらにエリート中のエリートだけが選りすぐられたクラスが、正体不明の武装集団に占拠された。そして、優秀な生徒をえこひいきをし、劣等生は退学に追い込むなどの問題行動を繰り返してきた担任教師が、人質となる。担任の命を救いたければ、広大な校舎の各所に隠された二百ものピースを探しだし、パズルを完成させなければならぬ。タイムリミットは四十八時間。命をかけた狂気のパズルを完成させることができるのだろうか。

「リアル鬼ごっこ」の作者による、ストーリーの怒涛の展開が、最後まで飽きることなく読み進めさせてくれると思います。

しゃぼん玉

乃南 アサ(のなみ あさ)

中本先生 新潮文庫

皆さん、いけないことをした経験はありますか？ それを誰かに責められるのが嫌で、隠したり、ごまかしたり、自分以外の責任にしたことってないですか？ そう言われてちょっと気まずくなった君に、読んで欲しい一冊です。

主人公の伊豆見翔人は、女性や老人のみをターゲットにひったくりを繰り返していた青年です。ある日、いつものようにひったくりを試みた翔人は、持っていたナイフで相手の女性を深く切りつけ、殺してしまいます。彼はがむしゃらに逃げ回り、やがて山深い村で一人の老婆と出会うのですが、翔人を老婆の孫と勘違いした村人たちは、なんとあれこれと世話を焼き始め、翔人の生活を一変させてしまうのです。

人の心の良い部分と悪い部分、その両方に苦しみながらも変わってゆく翔人の姿や、彼を変えてゆく村の人々の心に、きつと胸を打たれるはずですよ。

ケーキ王子の名推理

七月 隆文(ななつき たかふみ)

井上先生 新潮文庫

甘いものが大好きな女子高生、有村未羽は、甘いものへのこだわりを熱く語ってしまうことが原因でいつも彼氏に振られてしまふ。

そんな彼女が失恋の悲しみを癒すために訪れたケーキ屋で、学校一のイケメンである最上颯人と出会う。彼はパティシエを目指して修行をしており、未羽に冷たく接する。しかし、未羽の甘いものへの情熱を知り、だんだんと二人の距離が近づいていく。そんな二人の前に、いくつかのトラブルが舞い込んでくる。二人は、それらをお菓子の知識で解決しようとする。

この本は、題名に名推理とあるようにお菓子に関する知識をもとに推理し、トラブルを解決していきます。お菓子と推理って？ と思うかも知れませんが、実は関わりがあるものだったのです。

また、本の中に登場するお菓子はどれもおいしそうに書かれており、実際に食べたくなること間違いなしです。甘いものが好きな人には、ぜひとも読んでもらいたいです。



秘密結社にご注意を

新藤 卓広(しんどう たかひろ)

松本先生 宝島社文庫

自分の「気になり癖」のせいで会社をクビになってしまった青野の再就職先は清掃会社。しかし、それは表向きの仕事で、本業は秘密活動を行っている「秘密結社」であった。

仕事内容は「晴れの日に傘をさして歩く」や「ゲーム屋のお試しゲームを一時間する」といった理解できないものばかり。だが、そんな仕事に「ストーリー」「誘拐」「空き巣」と全く関係のないと思われる事件と複雑にからみあっていくのだった。色々な登場人物の目線から話が語られ、バラバラに感じるそれぞれの話が最後にどうつながるのかを考えながら読んでみてはどうでしょうか？

きつねのはなし

森見 登美彦(もりみ とみひこ)

名倉先生 新潮文庫

暑い暑いこの季節、少し怖い話はどうですか？ この小説は四つのお話からなる短編集です。特に面白かったのは表題作でもある「きつねのはなし」。骨董品屋でアルバイトしていた主人公が、店主からある屋敷へのおつかいを命じられた際、「その屋敷の主人とは、どんな小さいものであったとしても個人的な約束をしてはいけない。」と言いつけられます。しかし、主人公はその言いつけを破ってしまい……。

全体を通して、お化けのしわざ、霊の祟り、などと明確に決められず、なんともいえない不気味さを感じます。怖い話が苦手な人も読めると思うので、ぜひ手に取ってみてくださいね。

WONDER

R・J・パラジオ ほるぷ出版 桐先生

「オーガストはふつうの男の子。ただし、顔以外は。」この本の表紙に書かれている言葉です。

オーガストは「ふつうじゃない」見た目のために、今まで学校に通うことを避けてきました。しかし十歳を迎え、初めての入学を決意します。同級生にじろじろ見られるオーガスト。彼は「ふつうの男の子」ですから、そんな視線が嫌で嫌で仕方ありません。少しずつ友達もできるのですが、その友達がオーガストについて話しているのをうっかり耳に聞いてしま……!? さて、このあと学園生活はどうなっていくのでしょうか？

本書は八つの章からなっており、それぞれの章は語り手が異なります。主人公オーガストの章はもちろん、友達のジャックやサマー、姉のヴィアの章も必見です。身近な人の大切さに気付かせてくれる一冊、読んでみてはいかがですか？

駅伝ランナー

佐藤 いつ子(さとう いつこ)

八百先生 角川文庫

走るのが好きな主人公は、小学校生活最後の駅伝大会に出場したいと願っていますが、その願ひむなく、補欠になってしまいます。悔しさを抱えながらも、それを必死にのみ込み、走ることへのひたむきさを持って、毎朝自主トレを続けます。そして、大会当日、チームにアクシデントが起きて、正選手に代わってアンカーを走ることとなります。さて、その結果は……。くじけそうになりながらも、ゴールに向かってラストスパートをかける主人公の姿と、彼を見守る人々の熱い声援は、胸にくくと迫ってくるものがあります。特別な才能がなくてもあきらめず、好きだからこそ頑張ることの大切さがひしひしと伝わり、勇気づけられる作品です。ぜひ読んでみてください。

あすなる三七拍子

重松 清(しげまつ きよし)

濱口先生 講談社文庫

みなさんは、学校やクラブ活動、塾などで、毎日忙しい日々を送っているのではないのでしょうか？ そんな生活の中で、「他人を応援する」余裕がある人は少ないでしょう。しかし、この小説の登場人物たちは、ただ「ひたすら」に、「がむしゃら」に他人を応援しています。「応援」というのは、ただひたすらに誰かのことを思うことであり、そこに見返りなどを求めないこと。そして、時にはその応援が、自分のためにもなること。そういうことが感じられる作品になっています。

上下巻に分かれています。まずは上巻だけでも手に取ってみてください。十分楽しめる作品です。

ぶらんこ乗り

いしい しんじ

鳥居先生 新潮文庫

この本は、亡くなった弟が小さい頃使っていたノートを、高校生である私(姉)が見つけたことをきっかけに、当時のことを回想していく物語です。残された古いノートには、天使のような弟がこの世にたかまろうと必死で手をのばしていたこと、そして、痛いほどの真実が記されていました。

この作品を読むと、姉と弟の関係性、「優しさ」や「愛情」が深く感じられます。また、弟の作り話にある「いのちがけて手をつなげるのは、ほかでもない、すてきなこととおもっただよ」という言葉から二人のきずなが感じられます。

このように、「愛おしさ」がひしひしと伝わってくる作品です。みなさんも、家族のことや大切な人のことを思い出しながら、読んでみてください。

空をつかむまで

関口 尚(せきぐち ひさし)

久常先生 集英社文庫

主人公の優太は、小学校の頃に、膝を痛めたことを言い訳に大好きなサッカーをやめてしまいました。中学生になった優太は、部員だった三人しかいない、廃部寸前の水泳部に無理やり入部させられます。メンバーは、県の記録保持者である暁人と、同じく無理やり入部させられた、泳げないモー次郎。ある日、この三人に顧問から出された課題が、「トライアスロン大会に出場すること」。

膝が痛いと言い訳ばかりしていた優太も、合宿先で出会った鶴じいや、メンバーとの友情を深めていく中で、少しずつ自分と向き合うようになり、前向きになっていきます。この物語の一番の魅力は、何よりも三人の友情だと思います。悩みや嫉妬、いろんな感情を持ちながらも強い絆で結ばれていく三人に、皆さんもきつと勇気づけられるはずですよ。

キャベツにだって花が咲く

稲垣 栄洋(いながき ひでひろ)

高木先生 光文社新書

この本は、植物としての野菜の魅力を伝えてくれる一冊です。次のうち、「ゴボウの仲間になる花はどれでしょうか。」①バラ。②キク。③ユリ。正解は②のキク。「ゴボウはキク科の植物だぞうです。意外だったでしょうか。それとも、知っていましたか。私たちは普段見なれている姿だけで判断しがちですが、それは一面でしかないということを改めて感じさせてくれます。また、野菜や植物がどうしてそんな姿になったのか、どこからやって来たのかについても書かれています。それぞれの話のつながりは強くないので、目次をたしかめて興味をもったところから、読みはじめてもいいかもしれません。もちろん、前から読んでも良いですよ。

最後に問題です。次の中から、「イチゴと同じ科のもの」はどれでしょうか。①リンゴ。②ブルーベリー。③トマト。答えが気になる人は本を読んでたしかめてください。

